

倫理学を ELSI や RRI に役立てようとするのはよいことか

伊勢田哲治（京都大学）

さまざまな技術の倫理的・法的・社会的課題(ELSI)について考えることの重要性は近年ますます強調されるようになってきている。類似の考え方として、技術開発の上流において社会的な配慮を組み込む RRI (responsible research and innovation) という概念も重視されるようになってきている。ELSI の E が ethical の略である以上、倫理学と ELSI の間に何らかの関係があるのは明らかであるし、RRI の最初の R で想定される「責任」もまた倫理的責任を含むと考えられる。しかし、それでは ELSI や RRI は倫理学とどのような関係にあるのだろうか。そして、その関係のために倫理学が ELSI や RRI に対して貢献しようとすることはお互いにとって本当によいことばかりなのだろうか。

実際に ELSI や RRI として挙げられる課題を見ると、さまざまな対象の道徳的地位の問題やインフォームド・コンセントにまつわる問題、専門職に求められる責任など、関連する応用倫理学の分野で論じられてきたテーマと重なる場合が多い。これは応用倫理学そのものが 1990 年代以降 ELSI や RRI 的な関心に基づいて発達してきたという事情もあるだろう。しかし、そうした実際的な課題に集中することで、倫理学の中でも「役に立たない」問題設定（とはいえ学問としての倫理学にとっては重要なテーマ）が軽視されていくことにつながる可能性はある。

ELSI や RRI の関心から扱いにくい問題の例として、同一性問題がある。これは、選択肢によって将来存在するかが変わるような場合、異なるシナリオに登場する人物は別人であるため利益や害の比較が不可能になるという問題である。額面通りに考えるなら、もし別人の利益や害を比較することができないのなら技術開発においてもそうした人々は配慮しなくていい、という形で実践的な帰結を持つはずである。しかし、同一性の有無にかかわらず新技術の将来世代への影響は ELSI や RRI の主要関心事の一つであり、「シナリオ間の同一性がない人たちへの影響は考察からはずす」という結論になるとは非常に考えにくい。

もう一点、倫理学の本質とも関わるのが、批判的吟味をどこまで行なうのかという問題である。ELSI や RRI においては、インフォームド・コンセントの重要性や生物多様性の価値など、広く社会的に受け入れられた規範や価値は当然配慮すべき対象となる。これらがなぜ配慮の対象となるのかをさらに研究することは ELSI や RRI 的な関心とも齟齬しないであろうが、そもそも配慮する必要がないというラディカルな結論になるような倫理学的研究は、ELSI や RRI の中に居場所を持ちようがないように思われる。

提題者が危惧するのは、応用倫理学が「役に立つ」学問であろうとするあまり、こうしたテーマについて自己検閲のようなことをしてしまい、ELSI の報告書に書けるようなテーマに過剰に集中してしまうことである。そうした報告書からはみだす話題の中には、単なる知的遊戯のようなものもあるかもしれないが、倫理というものの本質を問い直すという倫理学の中心テーマとつながるものもあるであろう。そこを避けずに議論することこそ倫理学の存在意義があるのではないだろうか。